

能登の里山地域で
農業の将来を考える

全国農業担い手サミット



きのこの選別作業をご覧になる皇太子さま【29日・春蘭の里】

石川県を舞台に 全国の農業関係者が交流

農家の祭典「第16回全国農業担い手サミット in いしかわ」は10月29日から3日間、石川県内の11地域で開催され、全国各地で活躍する大規模農家など関係者が地元石川の担い手との交流を深めました。サミット初日の29日は皇太子さまが7年ぶりに能登町を訪れ、春蘭の里を見学しました。春蘭の里事務局長の多田喜一郎さんから説明を受けた皇太子さまは、きのこ選別作業を行うワン・ミンハウさん、セン・ケイブンさん、堂坂了さんに農家民宿の運営状況などを尋ねました。



①

翌30日、金沢市での開会式・全体

会に続き、国民宿舎能登やなぎだ荘で能登地域交流会・情報交換会が開かれました。実行委員会の南正晴委員長が「農業の多面的機能、農業と農村の役割に目を向けて行きたい」と参加した約90人にあいさつ。持木町長は農業を取り巻く環境の厳しさに触れ「情報交換し、足腰の強い農業にしたい」と参加者を激励しました。彌^{いやすか}榮太鼓保存会による太鼓も披露され、全国の農業関係者を歓迎しました。31日は2班に分かれ、町内を視察。それぞれの施設での事例や課題について学び、将来の農業の姿を考えました。

①彌榮太鼓の力強い演奏に拍手が贈られた【30日・交流会】、②柳田食産のブルーベリーワイン醸造タンクを見学、③直売所では海洋深層水を使ったトマトなどを試食【31日・おくのといち】、④耕作放棄地解消への取り組みについて学んだ【31日・内浦浦アグリサービス】



④



③



②

宝暦杉の物語

宝暦杉は珠洲道路沿い、寺分の広場に立つ、樹齢約260年の古木。江戸時代の農民たちの思いは平成の今も田畑を見守る。



宝暦年間の能登で何が起きたか

史料と史跡から見える農民の苦しみ

江戸時代の四大飢饉というと一般に「寛永」「享保」「天明」「天保」が上げられる。この中に「宝暦」は含まれていないため、知る機会が少ない。宝暦年間にはどのようなことが起き、農民が苦しんだのか。

農民が加賀藩十村役源五の屋敷を襲撃

「数千人バカリ又々押寄、源五ツブシ申候」―神和住の真念寺鬼簿帳の宝暦6（1756）年7月6日の晩の記述である。宇出津組の二十三か村の農民が加賀藩の十村役・源五の屋敷を襲った、「源五騒動」について記録した部分である。

騒動は翌日には藩の知るところとなり、他郡の十村役が駆けつけ取り調べにあたった。騒動の中心人物とみなされた五十里村治平、中斉村甚左衛門、藤ノ瀬村宗兵衛・七右衛門・市・九郎三郎、藤波村宗五郎の7人が金沢の牢に送られ、生涯を閉じた。

宝暦7（1757）年もひょうによる被害などで凶作。農民はますます困窮を極めたが、能登地区の十村は年貢の取り立てを強化した。明けて宝暦

8（1758）年、宇出津組で年貢米800石の不足が摘発される。責任を負って入牢したのが寺分村の勘十郎と五郎左衛門分村の太郞次郎。この2人が植えた木が現在の宝暦杉とされる。

一揆が発生した要因は何だったのか

加賀藩が設置した統治機構「十村」は数十〜数百の村を統括し、徴税や治安維持などにあたっていた。騒動が起きた宇出津組は23の村々で構成されていた。明暦元（1655）年に石川郡瀬上村から初代の十村役・源五が柳田に入村した。初代源五は農村の近世化に着手、各地の祭りを統合して柳田大祭の基礎を作ったとされている。寛文4（1664）年に宇出津に移住。宇出津でも「あばれ祭」を始めたと思われる。初代源五は延宝4（1676）年

没。襲撃されたのは子孫の5代目源五である。

一揆が発生した要因は、第一には自然条件に起因する凶作が挙げられる。真念寺鬼簿帳によると2年も前の宝暦4年の5月からは日照り続き、7月には害虫であるウンカによる被害を受けたとされている。翌年6月上旬には、幕府の巡検使が能登を視察しているが、飢えに対して手当はなかった。極限状態の農民は貸し米を申し出て、宝暦6年の4月に他国米が奥能登に貸し

▼能登町指定文化財「真念寺鬼簿帳」。「鬼簿帳」は過去帳のこと。佐々木山真念寺（神和住）蔵。第8世の慶俊が檀家の生死とともに天変地異や物価についても記載している。



能登に残る宝暦の史跡巡り①

1 宝暦杉



○寺分村の肝煎・勘十郎と五郎左衛門分村の肝煎・太郞次郎が植えた木とされる（能登町指定文化財）。幹の根元に割れが見つかり、平成3年からは2本の棒で支えられている。〈寺分〉

※へゝ内は所在地

能登町内には、多くの宝暦義民に関する史跡が残されており、当時の苦しみを今に伝えている。

2 宝暦義民碑



○宝暦杉の近くに地元 寺分・五郎左衛門分の有志により立てられた慰霊碑。昭和57年に開眼式典が開かれた。〈寺分〉

3 甚左衛門碑



○入牢した中斉村の甚左衛門を顕彰するため昭和37年に立てられた碑。鐘樓の横に立つ。〈神和住（真念寺境内）〉

4 治平地蔵



○五十里村治平を追悼するため村人によって設けられた地蔵。治平は自ら責任を負って牢に入ったといわれる。〈五十里〉



によって物価の高騰を招き、米の買い占めなどによって宇出津の蔵から米が消えたという。このため商人に対する庶民の怒りは大きく、宇出津町内の豪商宅も標的とされた。源五も出雲屋という商人を通じて金儲けをしているという噂がたち、農民たちの反感をますます強くした。

この銀札は騒動の後、宝暦6年7月によりやく廃止された。

主なできごと

宝暦5（1755）年4月
加賀藩、銀札発行を開始

宝暦6（1756）年7月
千人規模の農民が宇出津源五宅を襲撃

宝暦6年8月
騒動の首謀者として中斉村の甚左衛門、五十里村の治平ら7人が金沢に投獄される

宝暦7（1757）年8月
降ひょうや害虫被害が発生。この年も凶作となる

宝暦8（1758）年5・8月
奉行や他郡十村が宇出津組下800石の不足米について徹底的に詮議

宝暦8年10月
不足米の責任を取り、寺分村の勘十郎、五郎左衛門分村の太郞次郎、十郎原村の藤次郎らが投獄される

平成に生きる宝暦義民の魂

宝暦杉の史実伝承に挑む

村のため犠牲となった農民は「宝暦義民」と呼ばれる。

「宝暦義民」の生きた証しを広めようとする動きが活発になってきた。
小学校で上演されていた劇を復活、上演を通じて里山を守り通した先人の思いを伝える。

閉校した小学校に伝わる劇を復活

上町地区には明治8年創立の上町小学校があった。旧上町小学校の区域は寺分・五郎左工門分を含む、まさに宝暦騒動の中心地である。

上町小学校では昭和42（1967）年から、児童によつて宝暦義民の劇が上演されてきた。劇は発表会や卒業生を送る会などで上演が重ねられて、児童らの心に深く刻まれてきた。しかし、平成14（2002）年3月、児童数の減少により上町小学校は閉校。柳田小学校として新たに統合されることとなった。最後の公演は閉校記念式典にPTAによつて上演されたもの。地区住民は有線テレビによつて収録された番組をビデオに録画して繰り返し再生し、懐かしんでいた。

劇が再び注目されたのは、町教育委

員会が平成24（2012）年から実施している「公民館特色ある活動事業」がきっかけ。上町公民館は住民の結束を強めようと、恒例行事である上町保育所でのクリスマスツリーの点灯と宝暦杉の劇上演の2つを事業化した。

劇の上演を提案したところ、小学校閉校式での最後の公演に参加したメンバーを中心に、復活の動きが急加速した。12年10月には宝暦杉を訪れ、農民の思いにじかに触れた。そして復活第一回目の公演は今年6月、上町集会所で行われることになった。

練習は13年2月に開始。火曜日の午後7時から集会所や公民館で行われた。台本は閉校式で使われたものを参考にした。PTAでの上演の印象が強く、ほとんど当時の配役で劇に臨むことになった。練習中にはセリフをもじった冗談などで笑い声が絶えず、毎週火曜日の練習は楽しく行われた。

能登に残る宝暦の史跡巡り②

※地図は5ページ

5 藤次郎碑



○地元の有志によつて昭和59年に建てられた碑。碑の側面に病床の藤次郎に代わって、息子が入牢した頼末が記されている。〈十郎原（白山神社横）〉

7 宗五郎地蔵



6 藤ノ瀬義民碑



○藤瀬村から騒動に参加し、獄死した宗兵衛、七右衛門、市、九郎三郎の慰霊碑。〈藤ノ瀬〉



○一揆に参加した藤波村野宗五郎をまつているとされる。

〈藤波（神目神社下）〉

11年ぶりの公演復活と里山活性化への取り組み

復活上演の第一弾は6月9日に行われた。閉校式での上演から実に11年ぶりとなる。約50畳の一角をステージに見立て、幕代わりのカーテンや、仮設の照明を設置した。上町区の協力もあり上演までの数カ月間、集会場は舞台が設置されたまま利用された。当日は観客で満員に。約150人が手作りの劇を見守り、終演後にはおひねりが飛ぶなど盛況のうちに終わった。2回目の公演は、宝暦騒動について記載された史料「真念寺鬼簿帳」を所有する神和住の真念寺で行われることになった。期日は彼岸の法要後、観客は寺の檀家である。

このころ、県のいしかわ里山創成ファンドにアエノコト伝承とともに応募。選考を経て採択され、里山のにぎわい作りという使命を負うことになった。費用の一部を自己負担する必要もあり、これまでより責任が重い。メンバーは事業が里山支援事業として認定を受けたことで、一層練習に熱を入れた。10月には、上町公民館が事務局をつとめる全国風あげ能登大会の前夜祭で披露。全国から集まった観客が相手であったが、劇の思いは通じた。



▲宝暦杉を下見する出演者。この時から準備が本格化した。

【平成24年10月27日】



◀練習は火曜日の午後7時から行われた。仕事を終えてから約2時間の稽古



▲公演でのカーテンコール。出演者は初公演の成功に頬を緩めた【6月9日・上町集会場】



▼法事に参加した檀家のほか、6月9日の公演を見逃した人も訪れた【9月23日・真念寺】



▲真念寺本堂での公演
【9月23日】

次代を担う小学生に 農民の思いを届ける

小学校で始められた劇を、再び子どもたちに見てもらうチャンスを得た。11月9日、柳田小学校の学校開放日に合わせて、体育館での上演が決まったのである。

先述の閉校式に上演された劇はもともと小学生のために作られたもの。原案を作ったのは、昭和42年に上町小学校で勤務していた西又茂男さん（＝柳田）。担任だった6年生の児童に郷土の偉人について学んでもらい、後世に残せればという思いからであった。当直勤務の時間を利用し、夜10時ごろまで原田正彰さん（故人・柳田村史の編さんに携わった。）の指導を受けながら脚本を作り、子どもたちが劇に対してどのように取り組むか見守った。

11月9日、柳田小学校での上演に西又さんの姿があった。「小学一年生もそれなりに劇を理解している様子が見られた」と感じたという。西又さんは「地域で何とかしなければならぬ」と思い立って、劇を上演したことがうれしい」と話した。

後日、公民館に児童らの感想文が届けられた。子どもたちにも農民の苦しみと歴史の重みが伝わった。



▲柳田小学校の公演では、児童約160人と学校参観者、あわせて約280人が劇を見守った。



児童からのメッセージ

子どもたちからの感想文には、劇上演への感謝とともに、農民の苦しみを初めて知ったということや、一揆という手段に対する思いなど、大人が想像もしなかった感想がつつられていた。

「ぼくは笹川に住んでいるから宝暦杉のことは全然知りませんでした。ついに一揆を起こしたとき、ぼくは起ってもしょうがないと思ったけど、本当はやってはいけないこと。心のブレーキがかけられなかったんだと思います。」（5年生）

「私は寺分に住んでいます。しかし『宝暦杉』にそんな思いが込められているなんて知らず、おどろきました。私は地域のことをあまり知りません。なのでこれから調べようと思います。」（6年生）

「人々の思い、歴史、そしてあの杉の大切さを知ることができました。凶作で白い米が食べることができないのは、恐ろしいことです。今は店がたくさんあります。凶作でも店で買えます。昔は大変だったんだと思いました。」（6年生）

大人から子どもたちへ

池田澄子さんは上町小学校在学時、西又先生の指導を受けて昭和42年の初公演に参加した。

劇の上演後、数人の女子は感動で泣いてしまい、舞台から下りることができなかったという。劇のあと、作文に「顔の黒い農民になりたい」と書くほど感情が込められたものだった。

今回の小学生の感想を見て、涙が出たという池田さん。「当時、西又先生が私たちに何を学んでほしかったのかがわかった」と話した。

「農地を守った先人の苦労を改めて知ることができる」と、伝える意義の大きさを改めて振り返った。



▲昭和42年3月の卒業写真

十郎原の藤次郎碑の横にもう一基、小さな石碑が立つ。
そこには「魂ハ生テイル」と刻まれている。
これまで里山を守り抜いてきた先人の魂に思いを寄せながら
里山里海を守り、次の世代に届けなければならない。

魂

ハ

生テイル